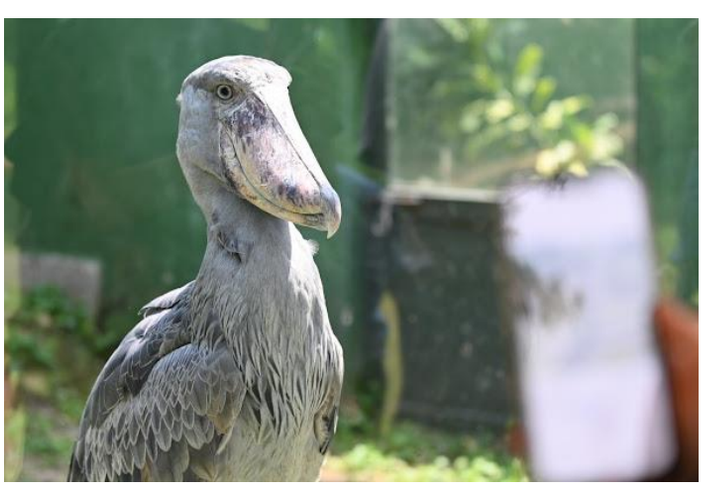
3

海外研修



UWEC のハシビロコウ

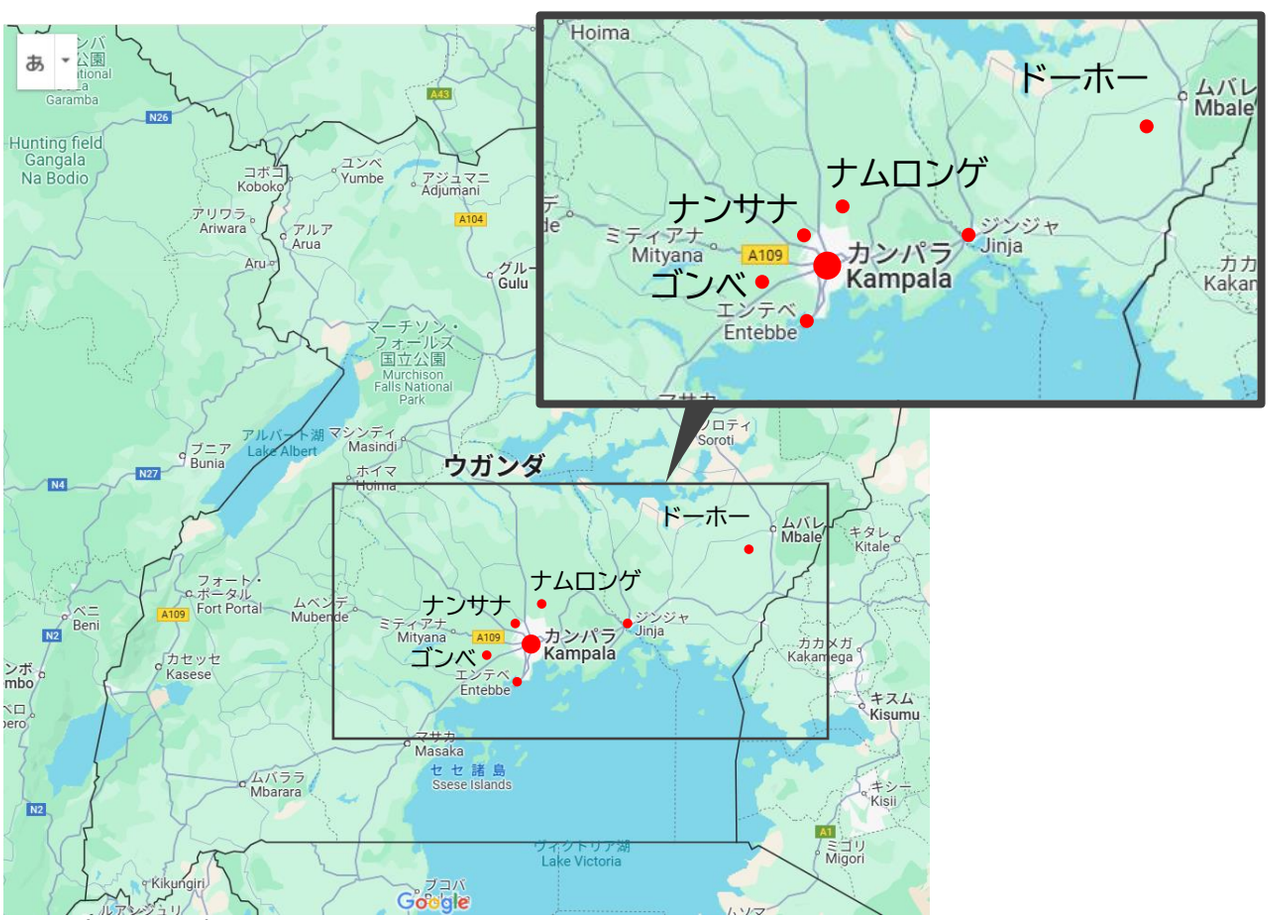
海外研修の訪問先（日程表）

※網掛けは視察・訪問先

日	時間	訪問先
7/21(日)	22:50	羽田空港発
7/22(月)	15:30	ウガンダ（エンテベ）着➡宿泊先へ移動
7/23(火)	9:30-10:15	事務所ブリーフィング
	10:15-10:55	安全ブリーフィング
	10:55-11:05	休憩
	11:05-11:20	草の根事業紹介（生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業）
	11:00-11:40	JICA のウガンダにおける難民協力について①
	11:30-12:00	「ウガンダ国農家向けラストマイルデリバリーサービスにかかるビジネス化実証事業（株式会社 CourieMate）」 紹介
	12:00-13:30	昼食
	12:00-12:30	JICA のウガンダにおける難民協力について②
	13:15-14:00	インフラ分野協力概要
	13:30-14:30	「カンパラ立体交差建設・道路改良事業」視察
	14:30-15:00	移動
	15:00-16:00	「KIIDP 交差点（Mulago、Kiburia）」視察
7/24(水)	7:30-9:00	移動（ホテル（Kampala）➡ナムロンゲ
	9:00-10:30	コメ振興プロジェクト（ウガンダ国立作物資源研究所（NaCCRI））視察
	10:30-13:30	昼食兼移動（ナムロンゲ➡ブウィクエ県ンココンジェル）
	13:30-14:30	リーチアウト ンココンジェル パリッシュ HIV/AIDS イニシアティブ訪問 瀬戸凌平隊員（コミュニティ開発）の活動視察
	14:30-15:30	移動（ブウィクエ県➡ジンジャ）
	15:30-17:00	「ナイル架橋建設事業」視察
	17:00-17:30	移動（宿泊先へ）
7/25(木)	8:00-10:30	移動（ジンジャ➡ドーホー）
	10:30-12:00	「コメ振興プロジェクト」視察 プロジェクト支援農家の圃場と協同組合での精米所視察
	12:00-17:00	昼食兼移動（ドーホー➡宿泊先（カンパラ））
7/26(金)	8:00-9:00	移動（宿泊先➡エンテベ）
	9:00-12:00	Uganda Wildlife Conservation Education Centre（UWEC）視察
	12:00-14:00	昼食兼移動（エンテベ➡ワキソ県カチリ）
	14:00-16:30	チブリ教員養成学校 片柳典子隊員（数学）の活動視察
7/27(土)	8:00-9:00	移動（宿泊先➡ワキソ県（ナンサナ））
	9:00-14:00	あしながウガンダ訪問 活動視察、交流授業
	14:00-15:00	移動（宿泊先へ）
	16:00-17:00	AAR（難民を助ける会）・難民アドバイザー山田専門家の講話

7/28(日)	午前	ウガンダ文化理解(モスク・クラフトマーケット等)
7/29(月)	9:00-10:00	JICA ウガンダ事務所訪問(報告会)
	10:00-13:30	昼食兼移動(カンパラ➡ブタンバラ県ゴンベ)
	13:30-16:30	ゴンベ中高等学校訪問 坂本晋太郎隊員(体育)の活動視察、交流授業
7/30(火)	17:30	エンテベ発
7/31(水)	2:35	ドーハ着 最終全体振り返り
8/1(木)	18:55	成田空港着 ※7/31 到着予定であったが、飛行機遅延の為 8/1 着。

海外研修の訪問先地図



Google Map より

各訪問先での研修者の学びや気づき

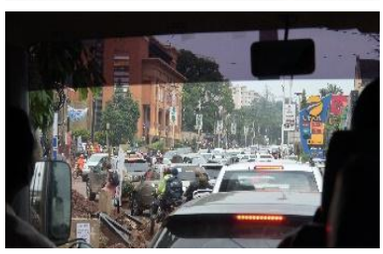
コメントは参加者提出の「海外研修報告書」より抜粋（原文）

7/22（月）

ウガンダ到着

1 日近くかかる長いフライトを経て、ウガンダに到着しました。

（初めてウガンダに到着した際の先生方の気づきや印象）



- 気候最高。予想以上に涼しい。緑が多い国の印象。
  ⇒（学校で行った）事前アンケートとの違いに気付き、ウガンダクイズ初級編にできそうだと感じた。
- バイクと車の量がとても多い。車はほとんど日本車。バイクは日本製ではないようだが、ヘルメットなしや2～4人乗りで運転をしている人が多い。車間距離は日本と比べるとかなり狭い。初めて交通渋滞にあう。
- 夕食のレストランの注文や提供のおぼつかなさが印象的。逆に日本のスムーズさに慣れてしまっているからそう思うだけかも？
  ⇒道徳の内容項目「相互理解・寛容」に関連付ける。終末の教師の説話に使えるかもと感じた。

7/23（火）

JICA ウガンダ事務所ブリーフィング

ウガンダ事務所　井上 陽一 所長、角田　聡子　職員、村山　昇平 職員、山江　海邦　職員、佐野　靖子　企画調査員、川口　彩子　企画調査員、網代　健人 NGO-JAPAN デスク

■ブリーフィング内容　：　ウガンダの概要や JICA の支援概要（草の根事業「生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業」、難民協力概要、インフラ分野協力概要）等についてお話を伺いました。

- 約40年続くゆるやかで安定した平和がウガンダの成長の土台、という言葉が心に残っている。ひとたび内政悪化・紛争戦争が起これば一気に崩壊する開発協力・草の根支援事業を考えると、安定した平和というのは1つのキーワードだと思う。

（生理で学校に行けなくなる女子学生の教育環境改善事業について）

- 生理によって10代の生徒の23％が学校をやめなければいけないという現状を聞き、生理についての自分や周りの理解が乏しいために起きると考える。正しい情報へのアクセスが限られているために、正しいことを知らずに、生理用品も代替品を使っていることに驚いた。中には土を布の中に入れて使うものもあり、衛生的に考えられない…。
- JICAの事業で、30の初等教育学校における学校の衛生設備の環境改善を図り、布ナプキンを作成するクラブを設立したり、そこで作成したナプキンや石鹸を学校のトイレに置いて誰もがアクセスできるようにしたりした。教師や家庭への啓発活動も行った。
  ⇒教育の重要性。日本も生理に関して似たような状況や問題があるが、それらに対して日本ではどんな取り組みができるかを考える活動ができそう。

株式会社 Courie Mate 代表取締役　松本弘 氏
　-ウガンダで実施する肥料デリバリーサービス等について

■事業概要 ： ウガンダ国の小規模農家が抱える様々な課題（収量が低い、農業資材（肥料）が普及しておらずアクセスも限定的、収入が低い等）に対してビジネスを通した解決を目指すため、農業資材の配送サービス（ラストマイルデリバリーサービス）及び BNPL（Buy Now Pay Later）サービスを活用したビジネスモデルの検証を行っている。（JICA 中小企業・SDGs ビジネス支援事業として実施中）
■講話内容 ： 事業内容について、推進する上での困難など、具体的なエピソードとともにお話を伺いました。

- 信じられるまともな住所が存在しない、というのが衝撃。宅配履歴が住所のビッグデータになる、というのは画期的だと思う。
  ⇒誕生日も住所も年齢も適当というのはあるあるらしく、日本人にとっては信じられないこと。場所が違えば価値観も異なるといういい見本になるかも。

「カンパラ立体交差建設・道路改良事業」視察
　清水建設株式会社・鴻池組 JV　プロジェクトマネージャー　大島　知幸　氏
　日本公営株式会社　コンサルティング事業統括部　山崎　竜一　氏
「カンパラ市交通管制改善計画」視察
　鴻池組　国際事業部　カンパラ市交通管制改元計画　所長　大里　務　氏

■視察先概要 ： 首都カンパラにおける、特に混雑の激しい主要交差点の立体交差化や交差点改良および既存道路の拡幅の支援を行っている。
■視察内容 ： 実際の道路や交差点を視察し、工事の上での安全対策や交通ルールの普及等、工事そのものだけでない支援の内容も含め、現地の方々と共に作り上げていく過程についてお話しを伺いました。

- 新しいものを受け入れる際に抵抗があるのは万国共通なようである。利用してもらうためにキャンペーンもしたそうで、視察時は利用している人が多くいた。
- 日本の建設会社の方が現地の若者を率いている姿がかっこよく見えた。→海外で活躍する日本人の姿のロールモデル。「海外で働く」は目的ではなくなにかを成し遂げるための手段。

7/24（水）

ウガンダ国立作物資源研究所（NaCCRI）・コメ振興プロジェクト視察
専門家：宮本　輝尚　氏、専門家：宮澤　譲治　氏、帰国研修員：Ms. Kampi Zainah、Mr. Jonah Ssemwogerere、Ms. NAKAYIMA Annet Margaret、Mr. Solomon Kaboyo

■視察先概要 ： 主に農作物の生産性向上と持続可能な農業実践の促進を目的として、さまざまな研究と技術開発を行っている。稲作試験・研究・普及の拠点として、同国におけるコメ振興の中心的役割を担う研究所であり、「コメ振興プロジェクト（PRiDe）」のカウンターパート機関。
■視察内容 ： 専門家・研修員よりコメの生産性と品質向上に向けた研究・普及体制の整備などについてお話を伺うとともに、実際の圃場見学をしました。

- ネリカ米発見！地理の教科書に乗っていたものを生で見ることができたことに感動。
- コメは他の穀物に比べ価格が1番高い。保存・調理・輸送にも便利。ウガンダでは水資源が豊富、いつ植えても育つ。都市化が進むとコメの消費量も増える。
  ⇒コメが日本だけではなくアフリカで人気であることを伝える。その理由はあえて提示せずに、生徒自身で予想を立てて考えさせてもよいかなと思う。

- 農業をやりたい人は半々ほど。政府も支援しているが課題としては、農業への関心を増やしていくこと。
  精米所の機械がよくないため、日本の70%ほどの収穫量になってしまうのが惜しい。⇒農業への関心は日本でも高くない。この現状どう考える？

リーチアウト ンココンジェル パリッシュ HIV/AIDS イニシアティブ訪問
瀬戸凌平隊員(コミュニティ開発)の活動視察
海外協力隊員:瀬戸　凌平　氏

■視察先概要　： ンココンジェル地区を拠点に、エイズ対策だけでなく、孤児の就学支援、農家への技術指導、住民グループでのマイクロクレジット導入、職業訓練等の幅広い支援活動を行う団体である「リーチアウト ンココンジェル パリッシュ HIV/AIDS イニシアティブ」において、既存の農業グループに対し稲作栽培に関する指導を行うと共に、農作物生産向上や販路拡大に繋がるアドバイスや活動を行っている。
■視察内容　： 農家の所得向上のためのコメの生産拡大や副業支援などについて、具体的にどんな活動をどのような方法で行っているかお話を伺いました。

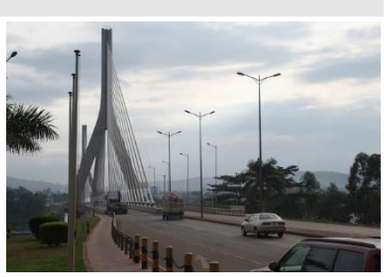
- 小規模農家の所得向上のためのさまざまな取り組みを紹介していただいた。特に、女性を対象に行っているクラフト作業は、目標が「毎日ご飯が食べられる。医療が受けられる」ということと聞き、衝撃的だった。
  →上記同様「生きるため」という大きすぎる現実を日本の生徒たちは考えたことはないと思う。私が感じた衝撃をまずは共有したい。
- 瀬戸隊員の「助言は浸透までに時間がかかる」という言葉が日ごろの活動のご苦労を物語っていると感じたが、そのような苦労を感じさせないほどの熱量でお話下さり隊員の皆さんの想いを感じることができた。
  →海外で働く人たちを紹介することで、生徒の視野を広げさせたい。正しい栽培方法を伝える上で最初は半信半疑だったウガンダ人も、収穫量が増えたり実が大きくなったりしたことで、だんだん良さを実感し、受け入れてくれた。

「ナイル架橋建設事業」視察
Uganda National Road Authority(UNRA)ウガンダ国家道路局
Maintenance Engineer　Mr.Baruga Swizin, Mr.Nelson Muyeya

■視察先概要　： ケニアのモンバサ港と首都カンパラを結び、ナイル川を通行するための新しい橋梁とアクセス道路を建設。ウガンダにおける北部回廊の輸送能力を増強し、交通の安全の確保、周辺国への輸送ルートが確保されることによる、周辺国との貿易活動の促進に寄与している。

■視察内容　： 橋を管理する UNRA の方々より、日本の支援内容や建設時の様子などについて伺い、管理室を見せていただいたり、実際の橋を歩いて視察したりしました。

- 「日本人と俺たち(ウガンダ人)が作り上げた」という誇りと矜持を強く感じた。支援はかくあるべきと思った。→やってあげる、という上から目線ではなく、協働的で自立につながるような支援ができたらいいなと感じた。
- 北部回廊の安全確保だけでなく、観光振興の役割も担っている。現地の学生が校外学習で大勢来ていた。



- 視察の際、UNRA のアーサーさん、ネルソンさんが橋の上に落ちていたごみを何気なく拾い上げていた。ウガンダではごみを平気でその場に捨てていく人が多いため、その姿はよく覚えている。こういった何気ない意識、行動からも、日本人との共同事業によって変わってきた価値観の表れが見えた。

7/25(木)

「コメ振興プロジェクト」プロジェクト支援農家の圃場と協同組合での精米所視察
専門家:宮本　輝尚　氏

■視察先概要　： コメ振興プロジェクトの支援先であるドーホーという郊外の地域。各農家の圃場のほか、農業協同組合の運営する精米所等がある。
■視察内容　： 農業協同組合、精米所の活動や現地農家の現状について、実際の圃場や精米所等の施設を見学しながらお話を伺いました。

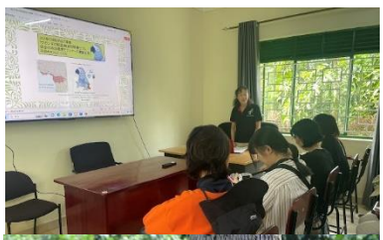
- 田舎になればなるほど道路整備や衛生設備の不十分さがうかがえた。
- 富裕層が営む小さな精米所が金貸し業もやっており、事前に田んぼの様子を見て貸し付けを決めることから「青田買い」にあたる言葉がある。
  →日本との類似点。米や稲作が生活様式等を規定する文化として共通であり、思想や発想に似たものが生まれうるという発見。「ウガンダは相手に同意であれば発言不要とする風潮がある」(by 山田専門家(難民支援アドバイザー、7/27 に講話))ということなどについても文化的側面や言語論的な視点から掘り下げることができそう。
- 農家が得た収入は教育につぎ込む。より高い教育を受けさせたいため私立へ行かせたいとのこと。(しかし実際は良い大学とされているところに行っても職がなく、バイクタクシーの運転手をしているという話もあるから複雑な気持ちになった。)
  ⇒教育への期待が高いが、日本ではどうか。

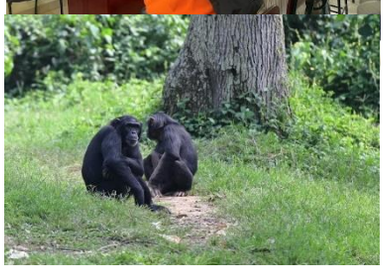
7/26(金)

Uganda Wildlife Conservation Education Centre(UWEC)視察
UWEC Dr. James Musinguzi(Exective Director)、UWEC Mr. Bulemu Hannington (Zoo Keeper)
海外協力隊員:加藤　夕貴　氏
「草の根技術協力事業　絶滅危惧種ヨウム保全の地域連携モデルケース構築支援」視察
現地調査員:鎌田　朱美　氏

■視察先概要　： 自国の野生生物の保全や積極的な保護意識の啓発を目的とした施設。協力隊員は、UWEC の機能強化を図ることで、上記の目的達成に貢献するための活動を行っている。
■視察内容　： 協力隊員や施設職員から施設の概要について伺い、専門家からは、密猟の対象となっているコンゴヨウムの保護と密猟を抑制するためのコミュニティ活動支援などについてお話を伺いました。

- 1度絶滅危惧種になると個体の遺伝、多様性の問題で野生での復活は絶望的。保護、養育して野生に返しても、密輸ですぐに捕られてしまう・・（密輸者も生活のために捕る者もいる）
- コンゴヨウムの密漁の根本にも貧困があると知り、貧困問題の根深さを感じた。
  ⇒動物の保護に関しては、事前アンケートで生徒の興味関心が最も高かった分野。原因である貧困問題とも関連させながら、対策を考える活動ができそう。
- 英語が話せるから海外で働くという考え方をしがちだが、やりたいことができるところに行く、それがたまたま外国だったという言葉が印象的だった。





チブリ教員養成学校・片柳典子隊員（数学）の活動視察
海外協力隊員：片柳　典子　氏

■視察先概要　： 首都カンパラにある男女共学・イスラム協会創立の小学校教員養成校。協力隊員は、小中学校の学力低迷の原因である教員の基礎的知識及び指導力不足等、教育現場の抱える問題解決のための支援を行っている。
■視察内容　： 視察時行われていた授業を見学し、挨拶・自己紹介等で短い交流を行った後、養成校における数学教育支援と学校の現状等について、実際の校舎や設備・備品を見せていただきながらお話を伺いました。

- 教師は自分の仕事に誇りを持ち、熱意を持って仕事をしている人が多い。社会的にも教師は重要な仕事だという認識がある。一方で、アルバイトのように求人が出されるのも現状で、教師の給料だけでは生活ができないため、副業をしている人も多い。
- 教員が授業内容を教えられないこともある。教科書も間違いが多い→日本との相違点（原因、考えられる問題点、解決策の探究）。日本の教科書は検閲が多くミスは少ない（あることはある）が、外国の教科書は「間違い探し」と揶揄されるほど間違いが多いと聞いたことがある。日本の誇れるところなのかもしれない。他の先進国はどうかを調べて比較する授業も考えられる。
- 学習環境は良くない。ゴミが落ちていたり、机が広くなかったり、時計などなかったり、黒板消しがなかったり…。しかしその中でも生徒は先生へのリスペクトは高く、ノートを一生懸命きれいにとっている（だけ）。
  ⇒自分たちの学習環境は？これは当たり前？

7/27（土）

あしながウガンダ訪問・交流授業
一般財団法人　あしなが育英会　岡崎 祐吉 理事、あしながウガンダ共同代表　Namukula Diana 氏、あしなが育英会国際広報担当　Lubega Ronald 氏

■視察先概要　： あしなが育英会の初めての海外オフィスとしてナンサナに設立。「あしながウガンダレインボーハウス」では親を亡くした子どもたちに心のケア活動を行い、「テラコヤ」では基礎教育支援を行っている。
■視察内容　： 理事より設立の経緯やこれまで・これからの活動についてお話を伺うとともに、心のケアプログラムの実際の活動に参加させていただきました。子どもたちとランチを頂いた後は、交流授業を行いました。

- 様々な家庭環境の子供たちが学校に集まり、生活をしている。子供たちとワークショップや文化交流を通じて、まっすぐな目を持った姿に感銘を受けた。笑顔が絶えず、学校は子供たちの安全地帯だという印象を受けた。
  →私の持っているクラスでも、様々な環境で生活している子供たちがいるが、その子たちが安全安心に生活することができるような環境つくりに取り組んでいきたい。道徳の授業に、クラスのみんなで考えていきたい。
- 授業でインタビューをしたところ、好きな授業（PC）、好きなこと（ネットボール）、幸せなこと（家族みんなでご飯を食べること）などの回答が得られた。
  ⇒日本の生徒にも同様の質問をして回答を比較してみると、親近感を持ったり、ウガンダについて理解したりすることに繋がると感じた。

AAR（難民を助ける会）・難民アドバイザー山田専門家の講話
AAR Japan 難民を助ける会プログラム　コーディネーター　相波 優太 氏、柳田 純子 氏
難民支援アドバイザー　山田　彩乃 氏（JICA 専門家）

■視察先概要　：　不安定な情勢が続くコンゴ民主共和国から逃れた難民が暮らす居住区において、教育支援、地雷・不発弾被害者の自立支援などを行っている。
■視察内容　：　ウガンダの難民受け入れの状況、現場の状況や支援の状況・あり方などについて実際の写真などを見せていただきながらお話を伺いました。

- ウガンダの「オープンドアポリシー」は、難民＝負担という固定観念から脱却し、難民を人的資源として捉えている革新的な考え方である。この考え方は障害者の社会参加にも通ずると思った。国籍、障害の有無、人種、ジェンダー、年齢問わず、全ての人間が平等に生きていく社会を実現ために必要な考え方だと思う。
- 難民地区での調査の仕方で、できるところから一つ一つやる、という考えに共感した。まずは行動あるのみ。

7/28（日）

ウガンダ文化理解（モスク・クラフトマーケット等）
ウガンダ国立モスクを見学した後、クラフトマーケットで教材収集等を行いました。

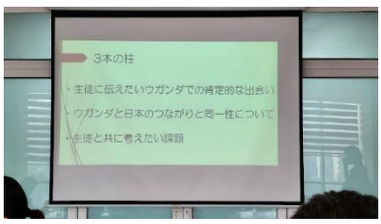
- キリスト教徒が多い国でも、イスラム教徒のために巨大な祈りスペースを備えたモスクがあることに驚いた。男性は常にここにきてお祈りに参加しなければいけないが、女性は家からでもお祈り可、というところに男女平等の考えはないのかという疑問。

- クラフトマーケットでは見るものすべてが新鮮なものだった。案外治安が良く、観光客慣れしている。店員さんはとってもフレンドリーで声をかけてくる。

7/29(月)

JICA ウガンダ事務所訪問(報告会)

これまでの海外研修における学びと、どのように授業に活かしていきたいか、各参加者より発表を行いました。



ゴンベ中高等学校訪問・坂本晋太郎隊員(体育)の活動視察・交流授業
海外協力隊員:坂本　晋太郎　氏

■視察先概要　： イスラム協会によって設立された全寮制の伝統的な学業・スポーツともに優秀な中高等学校。協力隊員は、2011 年より必修となったが指導経験が豊富ではない現場の支援のための活動を行っている。
■視察内容　： 交流授業を行った後、協力隊員の指導する体育の授業見学をしました。

- 日本語で挨拶をしてくれる生徒が多く、ぐっと距離が縮まる感覚を得た。母国語の安心感はすごかった。
- 曖昧な質問でもすぐに手が上がる。当ててほしい！答えたい！というパワーが伝わってきた。
- 教室内に80人ほどいる中、またスペースのない中のソーランだったが、体を動かすのが楽しかったのか、なぜか盛り上がりを見せた。
  ⇒授業は生徒を巻き込んでやるべきだと感じた。生徒が楽しめる工夫が大切。
- 交流が終わると我先にとノートをちぎり、日本の子ども達へメッセージを書いてくれた。ひらがなで「ありがとう」と書いている生徒もいた。
- (体育の授業で)制服やローファーのまま授業に参加している生徒がほとんどだった。

7/30(火)～8/1(木)

移動

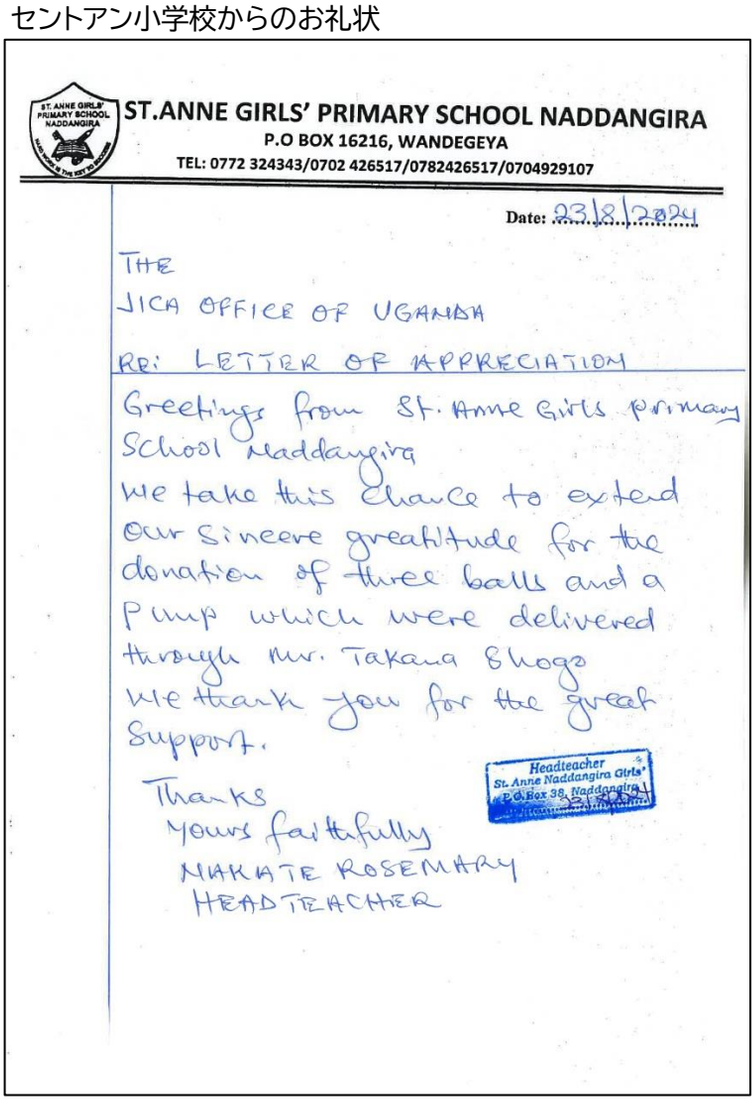
《サッカーボールの寄贈》
今回の教師海外研修では、つくば FC より中古サッカーボールをご提供いただき、訪問先である以下の教育機関に寄贈をしました。

- あしながウガンダ
- ゴンベ中高等学校
- セントアン小学校（今回の視察先にはありませんでしたが、JICA 海外協力隊である田中翔吾さんが活動中）

あしながウガンダ

ゴンベ中高等学校

セントアン小学校からのお礼状



ST.ANNE GIRLS' PRIMARY SCHOOL NADDANGIRA
P.O BOX 16216, WANDEGEYA
TEL: 0772 324343/0702 426517/0782426517/0704929107

Date: 23/8/2024

THE
JICA OFFICE OF UGANDA

RE: LETTER OF APPRECIATION

Greetings from St. Anne Girls primary School Naddangira
We take this chance to extend our sincere greatitude for the donation of three balls and a pump which were delivered through Mr. Takana Shogo
We thank you for the great support.

Headteacher
St. Anne Naddangira Girls'
P.O.Box 38, Naddangira

Thanks
Yours faithfully
NAKATE ROSEMARY
HEADTEACHER

交流授業案の概要

●あしながウガンダ

日本の遊びを体験しよう！

実践者	内山俊太、小川知美、北平浩美、後藤千春、土井菜奈子、堀内雅人、牧之段はるか、増田萌		
実践場所	あしながウガンダ	時間	55分
対象	その場で集まれる生徒さんたちとの交流を想定	実践教科	体育
ねらい	・日本の遊びを体験する交流を通して、日本とウガンダの異なる文化や価値観に気付き、互いに異文化理解を深めることができる。		

	時間（分）	方法・内容	使用教材
実践内容		**【実施場所】** 各教室、中庭等 **【目安人数】** 40～60 人（最低 20 人ぐらい、最大増えても 100 人ぐらい） （10:00-11:00 概要ご説明、レインボーハウス館内、寺子屋教室見学）	
	5	1. 11:00～ 交流①あいさつ・自己紹介 現地の言葉であいさつと自己紹介をする。	
	10	2. 11:05～ 交流①ソーラン節 教師がソーラン節を発表する。参加可能な児童は、教師の発表を見ながら一緒に踊ってもらう。 （交流後、13:00 までケアプログラム見学） （13:00～14:00 昼食）	スピーカー、ソーラン節音源データ、法被
	30	3. 14:00～ 交流②日本の遊び ※現地の活動場所を考慮する必要があるため、天候にあわせて実施内容を決定する。また、身体接触の可能性がある活動は、男女別のグループで行う。 <u>【晴れの場合：大縄跳び】</u> （1）教師が大縄跳びのやり方の説明・実演をする。 （2）児童が大縄跳びを体験する。 （3）目標回数を決めて跳び、景品として日本の生徒が作った折り紙をプレゼントする。 <u>【雨の場合：じゃんけん列車】</u> 男女別のグループで行う。 （1）教師がじゃんけん及びじゃんけん列車のやり方を説明・実演する。 （2）児童がじゃんけん列車を体験する。ソーラン節を流し、音楽が止まったら近くにいた人とじゃんけんをする。 （3）一列になったら先頭になった児童をみんなで称賛する。 （4）記念として日本の生徒が作った折り紙をプレゼントする。	【晴れの場合】 大縄、折り紙 【雨の場合】 スピーカー、折り紙
	10	4. 14:30～ 挨拶 お礼のあいさつをする。 （15:00～ 意見交換）	

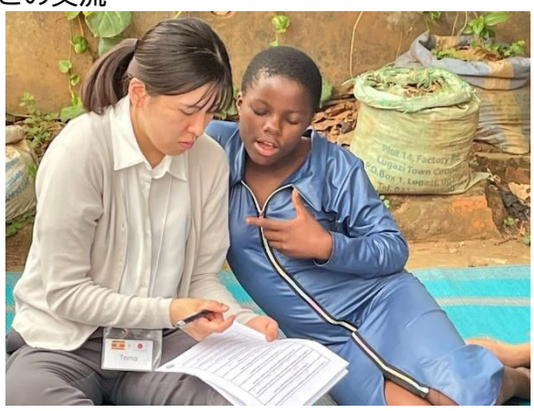
＜成果＞

- 同じ質問でも日本の子どもたちとウガンダの子どもたちの回答の差で、2 国の文化や状況、考え方の違いを感じた。日本の子どもたちがウガンダとのつながりを感じるきっかけにすることができた。
- 折り紙やソーラン節など日本の文化に興味をもってもらえてよかった。
  本校生徒にとっては、自分たちがつくった折り紙が「こんなにも喜ばれている」ということに、とても感激していた。小さいことではあるが人のために役に立つという経験をすることができた。
  「あしながウガンダ」という場所に興味関心をもってくれた教員仲間多数。
- ソーラン節を踊っている動画を見て、子どもたちもびっくりしていました。アルプス一万尺ができる子もいて、日本とウガンダの繋がりの気付きになった。
- こどもたちは人なつこく、人種の違いなど意に介さず積極的に関わってくれた。ソーラン節を見よう見まねで思いっきり踊っていたことが印象に残っている。
- 現地で働かれている日本人の方から直接お話しをお聞きすることができて、とても苦労をされていることを肌で感じたのと同時に強い意志があれば何でもできるということを改めて感じた。
- ソーラン節を通して、距離感が縮まった。どの子供たちも笑顔で踊っていた。
- 交流授業では、児童たちが元気よく活動しており、たくさんの児童と交流できるよう心がけた。ソーランは全力で踊ることで、日本の文化を良い形で伝えられたと感じる。
- 日本でも、あしながという団体は奨学金などで知っていたが、具体的にどのような活動を行っているのかまでは知らなかった。また、日本だけでなく世界中で活動している事がわかった。

＜気づき＞

- 日本人が定期的に訪問していることもあってか、当初授業実践で予定していた大縄は、到着した時に子どもたちがすでに取り組んでいた。心のケアプログラムに参加でき、とても勉強になった。
- どんな状況であれ、子どもの純粋さやパワーは我々大人にはもうかなわないなと思った。素晴らしかった。
  学校という場所の社会的役割をあらためて再認識した。（安心・安全な場所）
- 現地の大学生によるワークショップがあったため行えなかったが、大縄が時間があればできれば良かった。
- 子どもたちの笑顔の尊さは万国共通だということ。また、このあしながウガンダがなければこの子達はどうなっていたんだろうか、このような支援からこぼれている人たちはどのように暮らしているんだろうかと考えさせられた。
- 子どもたちと直接触れ合う中で、特に困っている様子は伺えなかったが、この子たちの背景は私たちの想像をはるかにこえる辛いことなどがあったのではないかと思った。会話をする中で、人の気持ちを何倍も感じてくれる様子からうかがえた。そんな背景を訴えてくる子どもがいなくて、子どもたちの強さも感じた。
- 言葉の壁は、積極的なコミュニケーションで乗り越えることができる。
  簡単な折り紙や短いメッセージでも喜んでいたので、もう少ししっかりメッセージは日本の生徒たちに書いてもらってもよかった。
- 識字率が高くないことを聞いていたが、実際に文字が読めなかったり、書けなかったりする児童がいた。またソーランや踊りは世界共通で、みんなで全力で踊るとそれが伝わるし、言語によるコミュニケーションに限らないことを痛感した。
- あしながに通っている子どもたちは、母子家庭の子どもや親をなくした子どもたちがいると聞いていて、どちらかというと後ろ向きな子やあまり明るい感じではないと思っていた。ですが、交流などを通して、子どもたちの様々な背景がある中でも元気に過ごしている姿をみて、たくましく生きている強さを感じることができた。

子供たちとの交流



ソーラン節でひとつに

最後の別れ

●ゴンベ中高等学校

異文化でコミュニケーション

実践者	内山俊太、小川知美、北平浩美、後藤千春、土井菜奈子、堀内雅人、牧之段はるか、増田萌		
実践場所	ゴンベ中高等学校	時間	55 分
対象	授業までの昼休みの間に坂本隊員が集めてくださる生徒さんたちとの交流を想定	実践教科	国語・社会・体育
ねらい	ウガンダの学生と日本の学生の互いに異なる文化や背景からなる価値観に触れて、相互の異文化理解を深めることができる。		

	時間（分）	方法・内容	使用教材
実践内容		**【実施場所】** 教室 **【人数】** 80 名程度（1クラス） （13：00～14：00　校長先生ご挨拶、学校案内、質疑応答、意見交換）	
	5	**1. 14：00～　あいさつ、導入** ウガンダの言葉で自己紹介	
	15	**2. 14：05～　True or False クイズ** 日本の学生が考えたクイズの動画 or 写真を見る。 一問ずつ答えて、解説をする。 （TF クイズのやり方） 日本の国旗の色のカードで回答する。 （例：A と思うなら赤のカード、B と思うなら白のカードを挙げる）	動画 プロジェクタ スピーカー 赤・白のカード
	15	**3. 14：20～　日本の学生がウガンダの生徒へインタビュー** 事前に日本の学生が考えたインタビュー動画を見て、ウガンダの学生に答えてもらう。	動画
	10	**4. 14：35～　ソーラン節** 出し物（受入れのお礼）として「ソーラン節」を披露する。 （ソーラン節音源：3 分半程度）	音源
	10	**5. 14：45～　挨拶・サッカーボール寄贈** お礼のあいさつ お礼としてお土産の折り紙とサッカーボールをお渡しする （交流後、15：20～　授業見学（体育））	折り紙

＜成果＞

- 日本の子どもたちからのクイズやインタビューの動画を上映でき、ウガンダの子どもたちが日本に対するイメージをより具体的に持つことにつながったと思う。
- どのような状況であれ我々教員は授業ができるし、やっぱり生徒と一緒に活動できるのは最高に楽しいと思えた時間だった。
  本校生徒は、自分たちとそう変わらない日常を送っているゴンベ中高等学校の生徒たちに親しみを感じたようで、ゴンベ中高等学校の生徒たちとオンラインでつながりたいという希望がたくさんでた。
- 英語でコミュニティケーションが難なくとれたことと、子どもの笑顔が見られてよかった。生徒に作ってもらった折り紙を持っているウガンダの子どもたちの写真を見て、生徒も嬉しそうだった。
- 現地の学生が日本のことやウガンダのことを言語化することで、改めて日本とのつながりや縁を感じてもらうことができた。
- 出発前から準備していたクイズが思いのほか盛り上がり、ウガンダの生徒が積極的にクイズに答えてくれる姿に圧倒された。準備をしっかりしていってよかったと感じた。ネット環境のトラブルに不安あったが、スタッフに大変サポートをしていただいたおかげでスムーズにやりたいことが得たいことが実際にできた。
- 体育の授業の様子を日本の生徒たちに話すととても驚いていた。裸足だったり、制服のまま体育をしていたりするところは日本では考えられず、生徒たちもウガンダとの違いを感じていたように思う。
- 日本の生徒達が知りたかったことについての回答が得られた。積極的な生徒達のおかげで、ウガンダの普段の生活の様子が少し理解できた。
- アフリカの子どもたちの前で、英語を用いて授業をすることができた。一方向の授業ではなく、質問やクイズなどを取り入れて、双方向で授業を行うことができた。

＜気づき＞

- ウガンダの子どもたちからメッセージを書いたメモをいただき、日本の子どもたちも非常に喜んでいた。目に見える形、手に触れられる形での交流の重要性を改めて知ることができた。
- 日本への興味が思っていた以上に高いのには驚いた（坂本隊員のおかげだと思うが）
  相手の伝えたいことを理解しようとするお互いの思いやりがあれば、言葉の壁は乗り越えられるのだと思った。
- せっかく赤白のカードを用意したのに、そこにコメントを書いてもらえれば…！とすごくすごく残念だった。思いつけばよかった。
- 問に不備があり、答えるべきものが曖昧になってしまった発問でも気にすることなく手を上げて答えている姿に衝撃を受けた。日本と大きく違うと感じるとともに、この違いが国民性によるものなのか受けてきた教育によるものなのか気になった。この視点は持ち続け、いつか答えを見つけたい。
- こんなにも日本に興味を持ってくれている生徒がいるなんて思っていなかった。
- 国は違ってもとても素直で元気いっぱいなところは日本と変わらないと思った。折紙のお礼として、メッセージをノートを使って書いてくれていたので、カードを用意しておいてもよかった。（クイズのときにつかった用紙に書いてもらってもよかった。）
- ウガンダでは、自分の意見を言うことが当たり前で、臆せず発表出来る生徒がとても多い。自分の話を聞いて欲しい、という素直な気持ちが伝わってきて、とても嬉しかった。日本の生徒にもこの良さを伝えていきたい。
- 体育の授業でグランドで走り幅跳びを行っていて、待っている際に女子生徒がふざけていると、先生が木の棒でお尻を叩いている光景を見て、体罰の存在を確認することができた。
  また、体育の授業では体操服などなく、制服で行っていて、靴もローファーや裸足で行っており、体育の授業の扱いが日本とは違うということに気づいた。
  狭い教室に長い机と椅子があって、そこに沢山の生徒がいる光景に驚いた。
  日本の教室では一人一つ机があるが、そのようなものはない環境で授業に集中できるのかと疑問に思った。

生徒との交流

体育の授業見学